



2002. 3. 22 No.26

Eastern Japan Section, The Japanese
Association of College and University
Archives

2001年10月3日(木) 全国大学史資料協議会 2001年度総会記念講演

記念公演：木村 碇氏 「大学史および大学史料を考える」を聞いて

東海大学史料編纂委員会事務室 加瀬 大

全国大学史資料協議会2001年度総会の記念講演として、木村礎氏のお話を聞く機会を得た。木村氏は、日本史を学んだことのある人なら誰でもが知っているように、日本近世史における地方史研究の第一人者であるが、協議会の会員にとってはむしろ『明治大学百年史』の編纂委員長として、その名を知る人も多いことと思う。今回の講演は、歴史学者木村氏の「大学史料」論の一端に触れることができたという意味において、私にとって非常に有意義であり、総会の記念講演としてもふさわしいものであった。

さて、木村氏の講演は、明治大学で長く大学史編纂事業に関わられたご自身の経験を紹介し、その経験から導き出された「編纂事業や史料保存に携わる者が留意すべき事柄」を指摘するかたちで進められた。はじめに、編纂事業をめぐる留意点について言及され、なによりもまず編纂に携わる委員会の自立性が確保されなければならない点を強調された。特定の立場や利害などによって歴史的な事実が左右されないような編纂体制をとることが、大学における年史編纂の基本だというのである。その上で、編纂委員会は関係史料を的確

に調査・収集・整理し、十分な時間をかけてそれぞれの内容を検討した後、歴史を叙述するわけであるが、その際には、大学史を日本近代史の中で位置づけようとする姿勢が大切になってくる。どの大学も、それぞれの時代の流れや精神と無縁ではあり得ない以上、日本社会との結びつきを重視し、大学を社会的な広がりの中で位置づける必要がある。したがって、教育制度史の史料については、収録や記載をつとめて限定し、個々の大学独特の校風が一般論の中に埋没しないように心がければならない。

また、大学が知的機関である以上、教師とその講義、学生については、積極的に取り上げる必要がある。とはいえ、教師の講義は膨大な数にのぼるため、歴史叙述としてすべてを取り上げることは実質的に不可能である。むしろ、その大学独自の「知的機関としての特質」を象徴する叙述となるよう、取り上げ方を考えるべきであろう。

さらに、財政問題や騒動・紛争を含め、大学にとって不利益となる事も書かねばならない。どんな大学も「きれい事」のみの歴史を歩んだわけではない。後に不利益となるよう



木村 磯氏の記念講演

な事も多くあり、そういうものが統一されてひとつの組織体をなしてゐる。したがつて、都合の良いことばかりの大学史は、信頼の置けない中途半端なものでしかない。しかし、都合の悪い部分も取り上げる立場で叙述する際には、最低限のルールとして、引用史料中の人名などに十分配慮する必要があるし、記述も追求主義に陥つてはならない。特に史料の取捨選択は、史料の価値判断の基準を明確化して、評価の公明性を高めねばならない。完全を期する事は出来ないけれども、神の代理人くらいの気持ちで史料を選択していくなければならない、等々の留意点が体験談を交えながら指摘された。

最後に、木村氏は、大学史料館の役割と業務について次の様にまとめられた。すなわち、大学史料館の仕事として最も大事なことは、収蔵史料の単なる保存ではなく、大学史史料の収集である。史料は、座して待つては集まらない。卒業生などのお宅を訪ねていくなど、自分から積極的に探しに行く。そうやってはじめて史料を集めることが出来る。そして、史料を収集したあとは必ず整理して目録を作成しなければならないが、同時に目録は誰が見ても分かるものでなければならぬ。きちんとした目録があってはじめて、大学の歴史に関する研究が本格的に始まり、収蔵史料が活用されるのである。

講演終了後、質疑応答に移つた。はじめに、日本と西洋の史料観の違いについて質問があり、木村氏より、各国の歴史的な社会構造の

違いにもとづいて、史料の残り方の特徴が生まれてくる点が指摘された。また、大学の不利益までも書く際、個人名等はどう扱うのかとの質問に対しても、プライバシーについては慎重すぎるくらいの配慮が必要で、本人や子孫に断つた上で処理するようにしているとの応答があった。さらに、「資料」と「史料」の違いについてどう考えるかとの質問に対し、木村氏は、言葉の歴史的な用法や自身の体験を紹介しながら、歴史書を編纂したり書いたりする場合には、歴史叙述への責任を含んでいるという意味を含めて歴史の「史」を用いるが、何でも集めておくという場合には資本の「資」を用いていると答え、質疑応答を終了した。



木村氏の講演は、平易な表現を用いて非常にわかりやすいお話であったが、その内容については、明確な立場と強い意思をもって臨まない限り、実行不可能なことのように思われるかもしれない。しかし、実際には、『明治大学百年史』は木村氏が紹介した基本方針に基づいて編纂・刊行され、その後も大学アーカイブス設立に向けた準備が進められている。その事実を考えるとき、私は、大学史編纂や大学アーカイブス設立の意義深さを改めて実感し、困難な課題にも正面から取り組む元気をいただいたような気がする。ご多忙中にもかかわらず、私たちのためにわざわざご講演くださった木村氏に、心からお礼申し上げたい。

全国大学史資料協議会2001年度総会ならびに 全国研究会の記録

関西大学年史編纂室 熊博毅
中央大学大学史編纂課 松崎彰

(1) 総会

2001年10月3日(水)から同5日(金)までの3日間、神奈川大学横浜キャンパスを主会場として全国大学史資料協議会の2001年度総会ならびに全国研究会が開催された。

開催に先立ち、10月3日13時30分から同キャンパス16号館2階セレストホールにおいて、同東西両部会の幹事会による全国役員会が開催され、今後の活動方針と総会・全国研究会の運営が検討された。はじめに、2001年度事業計画が審議され、各部会の事業計画を総会に報告する件が了承された後、両部会の共同事業の検討に移り、東日本部会から全国歴史資料保存利用機関連絡協議会・企業史料協議会と本協議会の合同研究部会開催の件が提起され、西日本部会幹事会の審議・了承を得た。これにより、全国役員会としては、東西両部会の共同事業として上記合同研究部会開催の準備に着手する件を議決し、総会の承認を受けることを決定した。

次に、総会ならびに全国研究会の運営について審議し、総會議長・副議長の選出は、立候補者を優先し、立候補者のない場合は役員会から推薦することを決定するとともに、受付・司会他の役割分担を決定した。また、東日本部会幹事会の審議事項として、明海大学の協議会入会（東日本部会）を2001年8月23日付で承認し、井上高聰氏（北海道大学125年史編集室）の協議会入会（東日本部会）を本年8月31日付で承認して、全国役員会を開会した。西日本部会の出席幹事は、桃山学院（部会長校）、立命館（副部会長校・会報担当校）、関西学院（会計校）、同志社（会報担当校）、神戸女学院（会計監査校）、関西大学（庶務校）、福岡大学（副庶務校）、龍谷大学

（幹事）の8大学、東日本部会からは、東海大学（部会長校）、慶應義塾大学（副部会長校）、神奈川大学（事務局）、中央大学（事務局補佐）、東洋大学（会計委員）、武藏野美術大学（会計委員）、日本大学（監査委員）、学習院大学（運営委員）、國學院大学（運営委員）、明治大学（運営委員）、中野実（監査委員）の11幹事が出席した。

全国役員会終了後、14時30分から同会場において2001年度総会が開催された。総会に出席した会員は、43大学62名・個人会員15名の計77名を数え、司会進行は中央大学（松崎彰）・関西大学（熊博毅）が担当した。はじめに、司会（中央大学）から、「全国大学史資料協議会規約」第7条により総会が成立した旨の報告があり、開会が宣言された。つづいて、会場提供を快諾くださった神奈川大学の山火正則学長から、大学の資料を保存・活用することの重要性と、大会成功への期待を込めたご挨拶をいただいた後、総會議長に國學院大學の益井邦夫氏を、同副議長に神戸女学院の佐伯裕加恵氏を選出して議案審議に移った。

第1議案「全国大学史資料協議会役員会の報告について（承認事項）」の審議では、副会長校桃山学院西口忠氏から、全国役員会の審議概要が報告され、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会・企業史料協議会と本協議会の合同研究部会開催の件につき両部会幹事会の合意が得られたので、今年度の東西両部会共同事業計画として上記合同研究部会開催の準備に着手したいとの提案があり、全会一致で承認された。また、第2議案の「2001年度部会事業計画報告（報告事項）」については、東西両部会の事務局（中央大学・関西大学）から各部会総会承認済みの事業計画が報告さ

れ、了承された。最後に、第3議題「その他」として会員からの議題提起を募った後、全国役員会からの提案として、桃山学院西口氏から、総会および全国研究会の主催部会は、これまで東西両部会が1年交替で交互に務めてきたが、来年度の準備状況によっては変則的な主催となる点をご了承いただきたいとの発言があり、審議の結果、全会一致で承認された。

総会審議終了後、15時30分から記念講演が開催された。講師は、木村礎氏（明治大学元学長・名誉教授／地方史研究協議会元会長）にお願いし、「大学史および大学史料を考える」の演題でご講演いただいた。木村氏の講演は、「(1)大学史の編纂について考える」・「(2)大学史料について考える」という二つのテーマを中心として展開し、第一のテーマについては、私立大学における大学史編纂事業が直面する問題点や課題を広く概観し、その意義や難しさを一般論として指摘した上で、『明治大学百年史』を編纂した経験に言及された。すなわち、明治大学では、自校の歴史を日本近代史の一部として描くことを基本理念とし、1) 社会との関連を重視する、2) 社会の知的潮流や学生の動向に留意する、3) 教育制度の資料や記述を限定する、4) 明治大学の独自性を重視する、5) 自大学の顕彰や論断の場としない、という五点の大綱にそつて編纂されたという。また、木村氏は、現在においては、上記の大綱に「大学に不利益と思われることも扱う」点を含めるべきと付け加えた。

第二のテーマについては、大学における史料問題を戦後日本社会に展開する史料保存（利用）運動の大きな潮流の一つとして位置づけるべき点を、強調された。したがって、大学史料館が担当すべき業務も、史料保存（利用）運動の成果に対応したものとなり、史料の収集から出版・展示等の利用に至るまでの作業を効率化するための努力や大学史の研究が必須となる。そして、明治大学では現在、上記の視点に立って「明治大学史料館」の設置を進めている、として講演を結んだ。講演後、木村報告をめぐって、文書資料の残

存形態に日本の特色はあるのか、「大学に不利益なことも扱う」際の原則はあるのか、「史料」と「資料」の違いは何か等々の質問も出されたが、質疑応答の詳細は本誌掲載の講演会記録を参照されたい。

記念講演につづいて、17時から懇親交流会が開催された。会場は、神奈川大学生協食堂であった。はじめに、協議会会長校として東海大学の瀬水澄夫氏が挨拶を述べ、竹市知弘氏（顧問）による乾杯の発声によって懇親会を開会した。会場では、各会員間の情報交換が活発に行われ、新会員の紹介や各校の近況報告等々、終始和やかな雰囲気の中で親睦が深められた。また、記念講演の講演者として木村礎氏も出席し、会場校からは橋川俊忠氏（神奈川大学）が挨拶するなど、盛況の内に閉会した。司会進行は熊博毅（関西大学）・松崎彰（中央大学）であった。（参加者・69名）

(2) 全国研究会

大会2日目の10月4日(木)には、全国研究会が開催された。本年度の統一テーマは「大学アーカイブスの設立と運営」とされ、大学アーカイブスを設立するまでに直面する諸問題を検討する分科会と、設立後の運営をめぐる諸問題を検討する分科会の2分科会が設けられた。会場となったセレストホールには、41大学64名・個人会員13名の計74名の会員が参集し、10時15分桃山学院学院西口氏の挨拶をもって全国研究会を開会した。

はじめに、統一テーマに対する基調報告として、2本の研究報告が発表された。第1報告は、神奈川大学日本常民文化研究所長の橋川俊忠氏が、「史料の保存と史料化—いかに保存してきたのか、いかに保存すべきか—」の演題で報告を行った。橋川報告は、歴史研究の前提となる史料論を検証することによって、大学史研究や大学史資料の保存運動への展望を導き出そうとするものであった。すなわち、橋川氏は史料の残存と継承のされ方をとりあげ、長年史料調査に携わってきたご自身の経験をふまえた上で、時間的淘汰を経て残存・継承される史料には、意図的に継承さ

れたものと、偶然性により残されたものがある点を指摘した。これらの史料は、多様な経緯を経て継承されており、それぞれの経緯に留意しなければ、適切な保存・記録・整理の方法論も構築することはできない。特に、近現代史の史料については、「整理するものと未整理のまま保存するだけのものとの区別基準を明確にする」点が重要となる。したがって、大学史の史料をめぐる諸問題についても、同様の視点から「文書の廃棄基準」を作る必要があり、個別大学の「正史」にとどまらず時代の「知の在り方」を描くための史料を残す努力が求められている点を強調して、報告を結んだ。報告後、文書の廃棄基準をめぐって質疑応答があつたが、その詳細については、本年度末刊行予定の『研究叢書』第3号に収録されることになっている。

第2報告は、京都大学大学文書館の西山伸氏が、「大学『文書館』と『大学』文書館—京都大学大学文書館が目ざすものー」の演題で報告を行った。西山報告は、2001年7月4日に開催された第26回東日本部会研究部会での報告をふまえ、京都大学大学文書館設立の社会的意義を体系的に論じたものであった。すなわち、2001年11月の大学文書館設立にいたる経緯、同館の諸規則・組織・施設の概要、史料受け入れから史料公開までの作業や研究・広報・教育活動等々にわたる同館の業務、実践面とそれを支える理念をめぐる今後の課題、の4テーマをめぐり、その具体的な実態と展望をのべ、各テーマごとに重視すべきポイントを指摘した。たとえば、学内の行政文書をシステムとして移管する際に事務局の果たすべき活動が重要となる点、学内の図書館や博物館との分業問題を保存史料の形態から考えてゆく必要がある点、などが強調され、最後に京都大学大学文書館が大学「文書館」として果たすべき社会的機能と、「大学」文書館として大学組織の活動を記録する機能の関連に留意しながら、自校史や史料学の研究成果を公開・継承する機関として、大学文書館を位置づけたいと展望した。報告後、学内関連諸機関との分業問題・行政文書の具体的な整理方法や廃棄基準をめぐる諸問題、史料の保

存施設をめぐる問題などが討議されたが、これもまた、本年度末刊行予定の『研究叢書』第3号で詳細に紹介される予定である。

基調報告を受けて、13時40分から分科会を開催した。昨年までは、発題の後、参加者は各分科会会場に分かれ、分科会ごとに問題提起と討議を行っていたが、本年度の分科会は、運営方法を若干変更し、問題提起の2報告を参加者全員で聴講した上で、各分科会会場にわかれ、テーマごとの討議を行った。はじめに、統一テーマを設定した経緯と意義について、担当部会東日本部会の松崎氏から発題があり、これをうけて2つの問題提起が報告された。

第1分科会中村青志氏の報告は、東京経済大学における大学史資料保存の歩みを概観し、その過程で直面した様々な問題や課題を具体的に紹介しつつ、大学アーカイブズ設立に向けた展望を導き出そうとした報告で、学内諸規程の不備や学内コンセンサスを得ることの難しさなど、多くの大学が共通に抱えている悩みを正面から取り上げた上で、それらの課題を克服して大学アーカイブズ設立を実現させてゆくために、年史編纂作業と並行した史料室体制づくり、史料室の役割に関する学内理解の深化、年史編纂委員会から独立した史料委員会設置、の3点の重要性を指摘した。

また、第2分科会西口忠氏の報告は大学アーカイブズ設立後、その活動内容を誰でもが理解できる形にまとめたハンドブックが必要になるという視点から、以前西口氏が作成し東西両部会の幹事会で検討中であった試案を、西日本部会案として再構成した『大学史料室ハンドブック—大学アーカイブズ業務の手引きー』の作成過程に則して、諸問題を提起したものであった。その上で、このハンドブックで残された課題として、電子機器による保存・検索体制や各大学の具体的事例他の諸問題をより深く検討する必要性を指摘された。

報告後、参加者は各分科会に別れて、テーマごとの討議を開始した。第1分科会の会場は神奈川大学横浜キャンパス16号館地下1階の視聴覚ホールBに設営し、司会は山口拓史氏（名古屋大学）、記録は谷本宗生氏（日本

大学）がつとめた。また、第2分科会の会場は同16号館1階の第2会議室に設営し、司会は田中利生氏（龍谷大学）、記録は菅真城氏（広島大学）が担当した。討議終了後、参加者は再びセレストホールに移動し、各分科会司会者から討議内容の報告を受けて全体の総括を行い、大会2日目の全日程を終了した。分科会の報告・討議の詳細についてもまた、本年度末刊行予定の『研究叢書』第3号に収録される予定である。



日本新聞博物館の見学（10月5日）

大会最終日の10月5日(金)は、午前10時30分に横浜情報文化センター2階受付に集合し、日本新聞博物館／新聞ライブラリーの見学会を開催した。同センターのご厚意により、7階情報文化ホールを会場として参集した参加者は、阪田秀氏（日本新聞教育文化財団事務局長）より、1987年に始まる日本新聞博物館の設立準備過程から2000年の同博物館開館にいたる経緯をお聞きした後、その運営と活動について詳細な説明を受けた。なかでも、同博物館の資料収蔵庫が横浜市緑区鴨居に別置されていることから、参加者から資料保存の実態をめぐる質問が出され、約5,200平方メートルの収蔵庫を賃貸しながら作業スペースとしても活用している、との応答があった。

その後、学芸部の藤高伊都氏から、同日開催の「開館一周年記念『明治のメディア師たち—錦絵新聞の世界』」展の概要が紹介され、同じく学芸部の徳永康彦氏の解説とご案内で展示を見学した。なお、瀬水澄夫氏（東海大学）から全国研究会閉会のご挨拶があり、その後は各自自由に同センターを見学した。

見学会開催にあたり、種々のご配慮を賜つ

た日本新聞教育文化財団の皆様に、心から御礼申し上げます。

出席校

<西日本部会>

大阪音楽大学、大阪国際学園、関西大学、関西学院、甲南大学、神戸女学院、西南学院大学、聖和大学、同志社大学、広島大学、福岡大学、桃山学院、立命館、龍谷大学

折田悦郎（九州大学大学史史料室）

山口拓史（名古屋大学大学史資料室）

原登久雄（顧問）

<東日本部会>

青山学院、学習院大学、神奈川大学、関東学院、國學院大學、慶應義塾、国際基督教大学、成蹊学園、専修大学、創価大学、拓殖大学、玉川大学、千葉商科大学、中央大学、東海大学、東京経済大学、東京女子医科大学、東北学院大学、東北大大学、東洋大学、日本女子大学、日本大学、法政大学、宮城学院、武藏学園、武藏野美術大学、明海大学、明治大学、立正大学、青柳小百合（株・ニチマイ）

井上高聰（北海道大学125年史編集室）

内山佳明（株・ニチマイ）

神谷智（名古屋大学大学史資料室）

谷本宗生（日本大学）

寺崎弘康（神奈川県立歴史博物館）

中野実（東京大学史史料室）

中村頼道（企業史料協議会）

西山伸（京都大学大学文書館）

日露野好章（東海大学課程資格教育センター）

竹市知弘（顧問）、城田英雄（顧問）

●東日本部会=56名

(内訳：29大学44名、顧問・個人会員12名)

●西日本部会=21名

(内訳：14大学18名、顧問・個人会員3名)

総計=77名

(内訳：43大学62名、顧問・個人会員15名)

2001年12月6日(木) 研究部会

学習院大学五十年史の執筆資料について

流通経済大学三宅雪嶺記念資料館・元学習院大学五十年史編纂室 平島 敏幸
 学習院大学庶務部大学庶務課・元学習院大学五十年史編纂室 桑尾光太郎

学習院大学五十年史編纂が2001年10月に終了し、事業のあらましを述べる機会をいただいた。これまでの研究部会では、編纂体制や事業終了後の組織あるいは資料保存が、問題として取り上げられることが多かった。今回は通史執筆に際して資料をどのように利用し、どのような観点から執筆を進めたかを報告の要点としたい。

1. 編纂事業の概要

大学五十年史編纂事業は、1994年から開始された。大学長を委員長とする編纂委員会が同年に発足し、大学五十年史編纂室が設置されて資料の調査・収集・整理が進められた。95、96年には編纂委員会とその下に置かれた専門委員会が定期的に開催され、刊行物や執筆体制の検討が行われた。刊行物は写真集、通史上・下巻と決定された。部局史編・資料編は編集せず、通史に部局史的な要素を入れ、また資料を積極的に引用する方針が採用された。

通史の原稿執筆は、各部局や教職員が分担して行う方法が一般的であろう。学習院大学の場合、専従の担当者がすべての草稿を執筆し、教職員から選出された専門委員会委員や各部局による校閲を経て、原稿を完成させる形がとられた。通史の執筆は97年に開始され、編纂室員（平島・桑尾）が分担して草稿を執筆した。執筆作業では、平島が主として大学・法人全体にわたる章・節を執筆した。桑尾は資料調査や涉外・諸事務を兼ねたため、各学部や学生生活など、個別のテーマを担当した。

専門委員会委員長は、井上勲文学部教授がつとめた。専門委員長は草稿の全体を点検し、内容の重複および異同の調整、用語・文体の統一などについて意見を提示した。専門委員長と編纂室員は、校閲意見を踏まえて協議しながら草稿のリライトを行い、原稿を完成させた。章・節構成や執筆分担の変更、記述の調整、表記の統一などは能率良く進めることができた。こうして1999年5月に写真集『学習院大学の50年』、2000年3月に『学習院大学五十年史』上巻、2001年10月に『学習院大学五十年史』下巻が刊行された。

2. 執筆資料の調査・収集

少数の編纂室員で通史を執筆するためには、資料の収集と、その資料を充分に利用できる条件の整備が不可欠となる。編纂作業では学内外の様々な資料について調査・収集・整理が行われた。執筆に用いられた主要な資料群をいくつか紹介する。

学内資料では、教授会・理事会・学部長会議・各種委員会の議事録など、学内における意思決定のあり方を示す資料が重視された。議事録の利用については95年から編纂委員会で審議が行われ、翌96年に閲覧利用許可が得られた。こうした議事録には公開すべきではない事項も含まれているため、閲覧利用に対する懸念も存在した。実際に原稿を執筆してみると、校閲の段階で議事録にもとづく叙述についてクレームを受けることはなかった。

特徴のある学内資料としては、学習院百年史編纂時に収集され法人院史資料室が所蔵す

る「財団改組関係資料」がある。これに加えて、総務部倉庫に保管されていた未整理資料の中から、財団改組前後の文書が大量に発見された。これらの資料群は、学習院が宮内省管轄の官立学校から私立学校に改組される時期の事務文書から成る。学外資料では、国会図書館憲政資料室所蔵のG H Q／S C A P文書の中から学習院に関する資料が発見され、宮内庁所蔵の学習院関係資料も利用する機会を得た。新制大学開設期については、国立教育研究所所蔵の戦後教育資料を利用した。

学内資料の調査・収集・整理を行った印象では、戦前や戦後まもない時期よりもむしろ、1960年代から70年代といった近年の基本資料が欠落していたように思われる。また、たとえば学長の諮問機関として設置されるような时限のある委員会の記録が、その委員会が解散した後に保存されていない事例もあった。こうした委員会は、重要事項の審議を集中的に行う場合が多い。記録保管を担当する恒常的な部署が必要であることと、その部署が単に歴史資料を保管するだけではなく、他部署と常に連携をとらなくてはならないことを痛感した。

3. 執筆と資料

『学習院大学五十年史』の通史部分の草稿執筆は、1997年4月に上巻の第2章から開始された。第2章は、宮内省が所管する官立学習院が私立に移管（財団化）される経緯が叙述される予定であった。本来の「大学史」ではなく、大学開設にさかのぼる「法人史」に当たるが、学習院の歴史の中でも重要な時期であること、また日本の戦後史としても意味のあることに配慮されて、重点的に記述することが決定された。ただし、この部分は1987年に出版された『学習院百年史』において既に詳細な叙述がなされている。『大学五十年史』の叙述は、これを越えることが求められた。

第2章が『百年史』の叙述を越えたとすれば、その要因は専ら新資料の利用に帰することができる。『百年史』で使用された資料は、「財団改組関係資料」としてまとめられていた。新資料は、先にも述べられている通り、



報告する平島敏幸氏（左）・桑尾光太郎氏（右）

総務部倉庫の保管資料、G H Q／S C A P資料、宮内庁所蔵資料の3つの資料群からなる。新旧両資料の対照・検討作業を通じて、『百年史』の叙述の空白部分を埋め、誤りを修正する、第2章の執筆はこのようにして進められた。執筆には、およそ1年を要した。

上巻の第3章以降は、開学構想から開学を経て1963年に至る本来の「大学史」である。担当者（平島）は、すでに他大学（流通経済大学）で大学史をひとわたり執筆した経験を持っていた。そのため、この部分の執筆にそれほどの困難はなかった。それと同時に、流通経済大学史の執筆方法が学習院大学の大学史に踏襲されることになった。

『流通経済大学三十年史』（1998年刊）の執筆は、基本方針を除いて、ほとんど担当者（平島）の裁量に任せられた。担当者は、次の諸点に心がけて執筆を行った。第1は、経営の問題を書き込むことである。これは、国立大学と異なって、私立大学がそれぞれの建学の理念をもち、その実現のために自ら大学を経営する存在であることによる。同時に、流通経済大学が「身売り」の危機を乗り越えた歴史があるため、大学運営の方針の決定に際して、特に教学と経営のバランスが考慮されていたからである。第2は、学内組織の成立と役割を詳述することである。これは、大学の運営が公正な手続きによって行われていることを大学の外部に示すとともに、大学の内部に対して諸組織の意味と役割の再確認を促すことを目的とした。第3は、教授会・理事会などの基本資料を豊富に引用することである。これは、資料の裏付けを示して記述の説

得力を増すためである。このことの背景は、流通経済大学でこれら議事録の自由な閲覧と引用が許されたことにある。以上の諸点は学習院大学史の通史部分においても踏襲された。3点目の資料引用に関しては、学習院大学でも議事録の自由な閲覧と引用が理事会・教授会の理解を得て認められた。

学習院大学史の上巻は2000年3月に刊行され、引き続き下巻の執筆が開始された。下巻は高度経済成長期以降を叙述の範囲とする。通史部分は、第5章が1964年の法学部・経済学部の開設と大学紛争、第6章が大学改革と百年記念事業、第8章が現況の叙述である。

第5章では、先に述べられた通り、1960～70年代の資料の散逸が見られた。ただし、学部開設に関しては、設置申請に要する書類や申請書が残されており、執筆は順調に進んだ。大学紛争に関しては、大学による詳細な記録が残されていた。これと同時に、当時のビラや立て看板の写しなども大学ならびに旧教職員によって保管されていた。当時の運動を中心人物への聞き取りなども行われたが、この部分の叙述は、ほぼ大学側の資料に負っている。

第6章の大学改革については、改革の基本方針を審議した特別委員会の記録が保管されるとともに、その報告書が印刷物の形で残されていた。学習院百年記念事業についても同様に記録が残されていた。ところが、これ以後は、大きな事業を行った後だけに、建物の建設や学部学科の新設といった動きがなくなった。資料がないだけでなく、書くべき内容が手薄になった。

これを解決したのが、先に述べた経営の問題を書き込むという方針である。と言うのは、大学に表だった動きが見られない理由は、事業終了後の資金不足が原因だからである。新規に事業を始める資金が不足しているだけでなく、旧事業のための借入金の返済も必要であった。したがって、この時期の理事会では、経営問題、特に中長期の財政計画について活発な議論が行われていた。事業後の大学の動向は、これを書くことによって支障なく執筆することができた。

新学部・新学科の開設や施設の建設などの外部の動きと、経営問題の議論や計画の策定といった内部の動きは、ちょうど表裏の関係にある。そのため、経営問題を中心とする内部の動向を記述したことは、時期による叙述の精粗を感じさせない効果を持ったものと思われる。

もう1名の担当者（桑尾）は、各学部・一般教育・学生生活・課外活動を分担した。担当者が1人で各学部・学科の詳細を書くことには限界があり、とくに学説史や研究業績の評価は難しい。叙述はカリキュラムや教員組織の変遷が中心となった。カリキュラムについては、毎年配布される履修要覧や学部案内等が基本資料となる。カリキュラム改正の意図を調べるうえで、教授会や各種委員会の議事録を欠かすことはできなかった。一般教育のあり方については、大学開学期から諸会議において絶えず議論が続けられていた。一般教育が学習院大学に限らず、50年の新制大学の歴史の中で大きな課題であったことを改めて感じさせられた。

4. 据 記

『学習院大学五十年史』、上巻が刊行された際、中野実氏（東京大学）より懇切な書評をいただいた（『日本歴史』2001年7月）。改めて感謝申し上げると共に、ご指摘を受けた点への説明も兼ねて若干の補足を行いたい。

『大学五十年史』には、一部出典が明記されていない資料がある。執筆に先立って、資料の整理が十分に行われなかつたことが主な理由である。草稿執筆の段階では補注や作業覚を作成し、典拠が必ずわかるようこころがけた。こうした記録はパソコンに保存され、問い合わせに対応できる措置がとられている。

下巻編集の段階では索引の作成が検討された。事項索引が最も利用価値が高いが、何を事項として選択するかが難しく、会議体などは同名異体ないし類似の名称も多い。刊行期限もあり、結局索引の作成は行わなかつた。不便を補う方法として、巻末の年表の各事項について、本文中の記載頁を示した。

2002年1月24日(木) 研究部会(見学会)

日本女子大学成瀬記念館・成瀬記念講堂見学記

國學院大學校史資料課 古 山 悟 由

第29回東日本部会研究部会は、2002年1月24日(木)に日本女子大学において開催され、同大学で開催されている「日本女子大学創立100周年記念 成瀬仁蔵と共に歩んだ人々展(2)」および「成瀬記念講堂を展示場とする特別展示」を見学した。

日本女子大学は1901(明治34)年4月20日、東京目白に成瀬仁蔵(1858~1919)を創立者として開校され、2001(平成13)年に創立百周年を迎えた伝統ある女子高等教育機関である。

当日は、成瀬記念館の秋山俱子氏から展示会全体の概略説明をしていただき、引き続き小橋安紀子、永田彩子の両氏により成瀬記念館における展示の解説をしていただいた。

成瀬記念館は、創立80周年記念事業として建設が企画され、1984(昭和59)年10月に開館された建物であり、博物館相当施設としての認可も受けており、学芸員養成の一端を担っている。建物内部には同地にあった附属豊明小学校の木材がうまく再利用されている。展示は、2階の中央ホール(記念室・瞑想室)、展示室、図書閲覧室および1階の会議室を利用して行われていた。中央ホールにはケース展示として成瀬の20代からの自筆日記が展示され、壁面には年譜などのパネル展示、中央にはロシアの女流彫刻家チェレミコフの「成瀬浮彫」が置かれていた。また、壁面上部には当学園の教育理念を示した三綱領「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」の書(複製、原本は絹布に墨書きされている。)が掲げられていた。

次いで展示室では、成瀬の紋服や遺品などの展示、壁面には当学園の発展充実に寄与した人々のパネル展示。臨時の展示室になって

いる図書閲覧室は、普段は成瀬の旧宅(校内に現存、現成瀬記念館分館)の書斎に有った図書の閲覧室であるが、今回は成瀬の思想の周辺と題して帰一会関係史料が展示されていた。

1階の会議室を利用した展示室では、日本女子大学校の教育・成瀬の精神を受け継ぐと題して、開校時の教職員の写真や校舎模型、授業風景の写真、校内地図などの展示および卒業証書などの展示があった。

成瀬記念講堂は、1906(明治39)年に「日本女子大学校豊明図書館兼講堂」として建設された。その後、関東大震災で大きな被害を受け、また1961(昭和36)年には改修工事が行われたが、ステンドグラス、木骨トラスなどの屋内は創建当初の姿をとどめており、1974(昭和49)年11月1日に文京区の有形文化財第1号に指定されている。

今回の展示では、この講堂で過去に講演をした人々をパネル展示で紹介した(36人)「講堂ー歴史の中の人々」、建物の変遷をその創建時の史料やコンピュータによって復元されたCGなどで展示した「講堂ーその建築と変遷」という2つの常設展示と、第1期から第3期までに分けて展示を行った特別展示の2つのコーナーに分かれていた。

特別展示は第3期「一つの彫刻から成瀬先生胸像をめぐってー制作者高村光太郎と写真で見る智恵子の紙絵」であり、完成までに14年の歳月をかけた高村光太郎の成瀬仁蔵胸像を創置時の場所に置き、その周囲に胸像制作過程を知る史料を展示していた。また当校卒業生でもあり、智恵子の大学での先輩にあたる宮崎千代子宛の自筆はがきや書簡が展示され、光太郎の甥である写真家高村規による原寸大の智恵子の紙絵も同時に展示されていた。

今回の展示では、パネル作成に博物館学課の学生の協力を仰いでおり、作成者の氏名がパネル下部に記載されていた。作成した学生にとっては大変な作業であったろうがよい記念になったのではないだろうか。また講堂内の展示には種々の工夫がなされており（柱

部分のパネル展示など）、歴史的記念建築物内での展示方法のよい見本となっていた。なお今回の見学日当日の「読売新聞（都民版）」に紹介記事が掲載されており、一般の見学者が多数いたことを付け加えておくと共にマスメディアの影響力を感じた。

全国大学史資料協議会

2001年度総会議事録（抄）

日 時 2001年10月3日(水) 14時30分～15時
 会 場 神奈川大学 16号館セレストホール
 出席校 西日本部会 14大学（18名）
 3個人会員
 東日本部会 29大学（44名）
 12個人会員
 開会司会 中央大学 松崎 彰氏
 関西大学 熊 博毅氏
 会場校挨拶 神奈川大学
 学長 山火 正則氏
 会長校挨拶 東海大学
 瀬水 澄夫氏

議長の選出

議 長 國學院大學 益井 邦夫氏
 副議長 神戸女学院 佐伯裕加恵氏
 議 事 (1)全国大学史資料協議会

 役員会報告（承認）
 (2)2001年度部会事業計画報告
 （報告事項）
 (3)その他

記念講演 講演者 木村 礪氏
 （明治大学元学長・名誉教授、
 地方史研究協議会元会長）
 演 題 「大学史および大学史料を考える」
 懇親会 神奈川大学生協食堂
 出席者69名

全国大学史資料協議会

2001年度役員会議事録（抄）

日 時 2001年10月3日(水) 13時30分～14時
 会 場 神奈川大学 16号館セレストホール
 出席校 西日本部会幹事校
 桃山学院 立命館 関西学院

同志社 神戸女学院 関西大学
 福岡大学 龍谷大学
 東日本部会幹事校
 東海大学 慶應義塾 神奈川大学
 中央大学 東洋大学
 武蔵野美術大学
 日本大学 学習院大学 國學院大學
 明治大学 中野実氏

議 事 (1)2001年度事業計画について
 (2)2001年度総会の議長・副議長につ
 いて
 (3)2001年度総会・全国研究会の役割
 分担について
 (4)その他

全国大学史資料協議会

2001年度全国研究会記録（抄）

（第27回東日本部会研究部会）

日 時 2001年10月4日(木)～10月5日(金)
 場 所 10月4日 神奈川大学
 16号館セレストホール
 10月5日 新聞博物館、新聞ライブ
 ラリー
 参加校 (10月4日)
 西日本部会 14大学（18名）
 3個人会員
 東日本部会 28大学（43名）
 10個人会員
 総 計 41大学（61名）
 13個人会員
 (10月5日)
 西日本部会 14大学（17名）
 3個人会員
 東日本部会 20大学（30名）
 5個人会員
 総 計 34大学（47名）

8 個人会員
 [10月4日 神奈川大学 16号館セレストホール]
 開会挨拶 西口 忠氏（桃山学院）
 1. 報告 橘川 俊忠氏（神奈川大学 日本常民文化研究所長）
 （演題）「史料の保存と史料化
 —いかに保存されてきたのか、
 いかに保存すべきか—」
 2. 報告 西山 伸氏（京都大学大学文書館）
 （演題）「大学「文書館」と「大学」文書館—京都大学大学文書館の目ざすものー」
 3. 分科会
 初題「統一テーマ『大学アーカイブズの設立と運営』の設定にあたって」
 松崎 彰氏（中央大学）
 第1分科会問題提起
 「大学アーカイブズの設立に向けて
 —東京経済大学の場合」
 中村 青志氏（東京経済大学）
 第2分科会問題提起
 「大学史料室ハンドブック
 —大学アーカイブズ業務の手引きー」
 西口 忠氏（桃山学院）
 4. 見学会 日本新聞博物館／新聞ライブラリー

全国大学史資料協議会東日本部会幹事会議事録（抄）

第38回の東日本幹事会は全国大学史資料協議会2001年度役員会として開催された。
 第39回 2001年12月6日(木) 13時30分～15時
 会場 明治大学 リバティータワー
 19階第6会議室
 出席校 学習院大学 神奈川大学 慶應義塾
 國學院大學 中央大学 東海大学
 東洋大学 日本大学
 武蔵野美術大学 明治大学
 議事 (1)2001年度の部会運営について
 (2)2001年度の出版事業について
 (3)その他

第40回 2002年1月24日(木) 13時30分～15時
 会場 日本女子大学 桜楓2号館302号
 出席校 學習院大学 神奈川大学 慶應義塾
 國學院大學 中央大学 東海大学
 東洋大学 日本大学
 武蔵野美術大学 明治大学
 谷本 宗生氏 日露野好章氏
 議事 (1)2002年度の事業計画について
 (2)2002年度の役員について
 (3)その他

全国大学史資料協議会東日本部会研究部会記録（抄）

第28回 2001年12月6日(木) 15時～17時
 会場 明治大学 リバティータワー
 19階第6会議室
 参加校 20大学 1個人会員
 オブザーバー 2名 計34名
 報告 桑尾光太郎氏
 (学習院大学50年史編纂室)
 平島 敏幸氏
 (流通経済大学)
 「学習院大学50年史の執筆資料について」

※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した平島敏幸氏、桑尾光太郎氏の報告をご参照ください。

第29回 2002年1月24日(木) 15時～17時
 見学会
 会場 日本女子大学
 成瀬記念館・成瀬記念講堂
 参加校 24大学 個人会員 2名 計39名
 ※研究部会の内容につきましては、本号に掲載した古山悟由氏の報告をご参照ください。

お知らせ（訃報）

東日本部会顧問 村松良人氏（元中央大学大学史編纂課）は病気療養中のところ
 2月26日(火)午後7時20分永眠されました。
 享年64歳。ここに心からご冥福をお祈りし、謹んでお知らせいたします。